

## 平成18年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 採択教育プログラム 事業結果報告書

教育プログラムの名称	: アジア国際産業医学研究者養成プログラム
機関名	: 産業医科大学
主たる研究科・専攻等	: 医学研究科・障害機構系専攻 [博士課程 (一貫制)]
取組実施担当者名	: 河野 公俊
キーワード	: 外科学一般、病態医化学、公衆衛生学・健康科学、環境生理学

## 1. 研究科・専攻の概要・目的

産業医科大学大学院は、産業医学の振興と優れた産業医の養成という産業医科大学の目的および使命に基づき、医学に関する学術の理論および応用を教授研究し、その深奥を究めて、自立して研究を行うに必要な高度の研究能力とその基礎となる豊かな学識を有する教育研究者の養成を目指している。

産業医学は基礎医学、臨床医学、社会医学はもとより、広く自然科学、人文科学を包括した総合科学に発展している。医学を「病気の科学」としてだけでなく「健康の科学」としても把握し、労働と働く人々の健康の関係を解析することにその基礎をおいている。このような観点から本学大学院は、産業医学における①学術研究の高度化と優れた研究者の養成機能の強化、②高度専門職業人の養成機能、社会人の再学習機能の強化、③教育・研究を通じた社会貢献、国際貢献をその目的としている。これまで、昭和63年から産業医学分野におけるわが国唯一のWHO指定協力機関として活動してきたほか、JICA国際研修コース(昭和61年以来連続22年実施)や国際遠隔講義(平成14年以来連続6年実施)を実施するなど、わが国の産業医学研究の中核的機関としてその機能を果たしている。

本学医学研究科は、生体適応系、環境・産業生態系、障害機構系、生体情報系の4専攻から成り、さらに各専攻はそれぞれ3部門で構成されている。従来の医学系研究科の多くが、基礎医学、臨床医学、社会医学という区分を明確にしているのに対して、本学医学研究科は、このような区分にとらわれず、研究上の関連を持つ教員、講座等を各専攻・部門に配置することによって、柔軟かつ横断的な教育・研究が可能となるような構成となっている。また、各部門を複数の講座等が担当する大講座制を採用しているため、学生は講座制の制約を受けることなく、それぞれの専攻・部門における専門的教育、研究指導を受けることができ、学際的な分野における知識の

修得と研究を広く推進することができる。

平成19年11月1日現在、大学院担当教員数は76名、学生数は98名である。

## 2. 教育プログラムの概要と特色

本学は、産業医の養成と産業医学研究を目的に設立された世界でも稀有な大学であり、働く人々の健康を科学し、その増進と活力創出を目指す研究が求められている。医学の急速な進展や高齢化社会の到来を迎え、産業医学研究には広範な生命科学と医学領域をカバーする研究が必要不可欠となっている。即ち、生体情報のよりの確な解析に裏付けされた医学研究の展開ができる人材の養成が急務である。また、経済活動の急成長を続けるアジア各国では、人的基盤を支える産業医活動の需要が今後急速に高まることが予想される。

本教育プログラム「アジア国際産業医学研究者養成プログラム」は、拠点校を含むアジア各国の大学から、毎年5名の産業医学研究に関心のある留学生を公募し、日本人学生とともに競争的環境のもと、学際領域の研究を推進できる国際水準の産業医学研究者の育成と国際的に通用するアジア地域の産業医学研究ネットワークの構築を目指している。

具体的な履修プロセスの概念図は、図1に示すとおりである。

トータルヘルスプロモーションの科学的基盤構築と国際貢献を目指し、2つの教育プログラム、ホメオサーベイランスバイオロジー(HSB)教育プログラムとプリベンティブバイオエピデミオロジー(PBE)教育プログラムを専攻共通講義としてコースワーク化する。前者は生体機能を監視する制御機序を分子レベルで明らかにするものであり、後者は生体分子から予防疫学研究を進展させるもので、産業医学全般をカバーする。すべての教員に対して、現行カリキュラムの一部について英語講義を義務付けるほか、アジア拠点校から教員を招聘し講義、セミ

ナーを開催し、その資料を基に英語講義ノートを作成する。

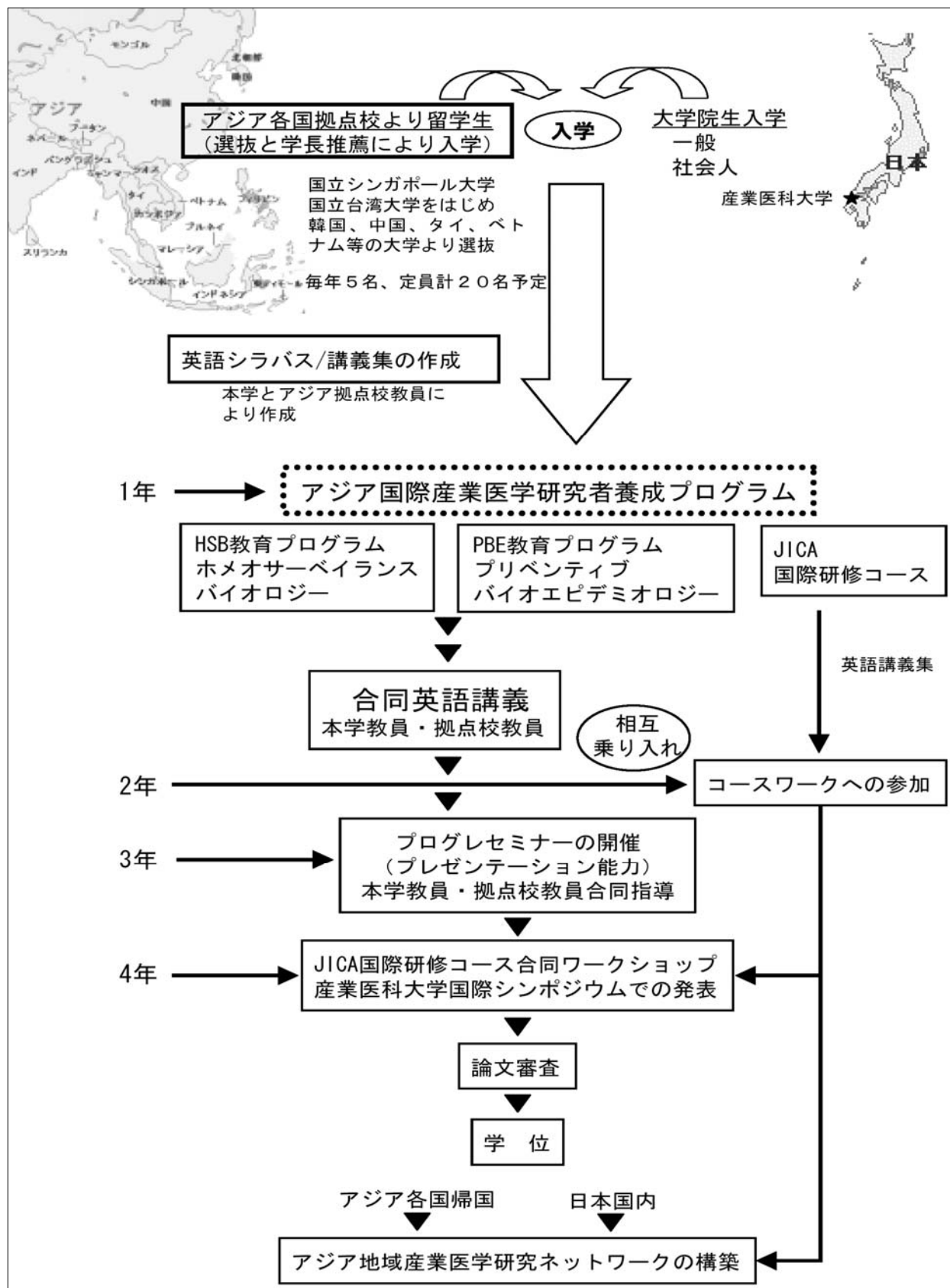


図1 履修プロセスの概念図

既に英語で実施されている JICA 国際研修コースと相互乗り入れを行い、学生には一部の受講を義務付ける。その後の研究指導では、3 年次でアジア各国の留学生と日本人学生によるプログレスセミナーを開催し、本学教員と拠点校教員による指導を通じて英語プレゼンテーション能力の向上を図る。4 年次では、JICA 国際研修コース参加者との合同ワークショップに参加させ、研究成果の発表を義務付ける。

これにより、科学的根拠とその研究基盤を理解実践し、次世代の新しい産業医学研究を推進できる、国際感覚にあふれた産業医、産業医学研究者を養成し、将来にわたる国際産業医学研究交流の基盤を創生する。

### 3. 教育プログラムの実施状況と成果

#### (1) 教育プログラムの実施状況と成果

##### ① アジア留学生推薦入試の実施

アジア各国の大学に対し、産業医学研究に関心のある留学生の公募を行うため英文募集要項を作成した。

平成 18 年度は、13 ヶ国 26 大学に公募を行い、6 ヶ国 10 大学から 10 名の留学生の推薦があった。推薦書類に基づき慎重に審査を行い、3 ヶ国 5 名の推薦入学者を決定し、平成 19 年 4 月に 4 名が入学した(写真 1)。その内訳は中国 3 名、イラン 1 名であり、いずれも医科大学(医学部)出身で、既に母国で医師として活躍している優秀な学生である。入学後のオリエンテーションを経て希望した専攻に所属し、指導教授のもとで講義、セミナー、研究等に日本人学生とともに参加した。また、JICA 国際研修コース、国際遠隔講義にも参加した。



写真 1 平成 19 年度入学オリエンテーション

平成 19 年度は、15 ヶ国 31 大学に公募を行い、4 ヶ国 6 大学から 7 名の応募があった。審査の結果 3 ヶ国 4 名の推薦入学者を決定し、平成 20 年 4 月に 3 名(中

国、台湾、ベトナム各 1 名)が入学した。入学式後に、前年度入学者 4 名を交えてオリエンテーションを行い、カリキュラムの履修・評価方法、4 年間の学習・研究への取り組み、特別講義、JICA 国際研修コースへの出席等について指導した。(写真 2)



写真 2 平成 20 年度入学オリエンテーション

##### ② カリキュラムの実施等について

i) 学生の英語能力の向上を図るため、学内ネットによる個人学習が可能な英語学習システムを導入し、学習環境を整備した。学生は、大学院生自習室や講座の居室から、随時、システムの利用が可能となっており、自己学習に有意であるとの好評を得ている。また、留学生の日本での生活基盤を支える目的で、教材を用いた日本語教育も実施している。

ii) 平成 18 年度には、大学院担当教員のみならず、すべての教員に対して英語講義のサマリーを提出させ、その資料を基に 2 つの教育プログラム(ホメオサールバイランスバイオロジー(HSB)教育プログラムおよびプリベンティブバイオエピデミオロジー(PBE)教育プログラム)を編成し、それに沿った英語講義ノートを作成した。(写真 3)

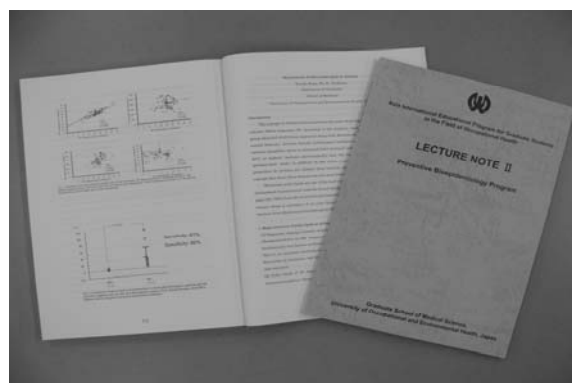


写真 3 英語講義ノート

平成19年度には、本教育プログラムで受け入れたアジア留学生に対して、英語論文作成法や研究倫理等に関する研究・実験ガイダンスをはじめ、英語による講義をこの講義ノートに基づいて実施した。この英語講義には、アジア留学生のほか一般の留学生も参加した。

平成20年度は、この講義ノートのほかにも英語講義を行う科目を拡充し、日本人学生と留学生を一緒に受講させる。これによって、留学生と日本人学生とが競争的環境の中で互いに意欲と能力を高めあい、大学院教育の活性化と充実化を図ることができる。

iii) JICA 国際研修コースは、平成18年度は「持続可能な発展のための職業環境保健マネジメント」をテーマとして8月14日から12月1日まで開催され、学内外の講師による英語講義が実施された。またこの間に産業医科大学国際シンポジウム、本学と国立台湾大学、国立シンガポール大学を結んでの国際遠隔講義が合わせて開催され、JICA 研修生とともに多数の大学院学生が参加した。(写真4)



写真4 国際遠隔講義

平成19年度の同研修コースは、前年度同様のテーマで8月15日から11月30日まで開催された。平成19年度から新たに受け入れたアジア留学生もこのコースに参加させた。国際遠隔講義についても前年度同様、本学、国立台湾大学、国立シンガポール大学を結んで全18回の講義が開催され、講師や各大学の学生との間で活発な議論が交わされるなど、留学生は勿論、日本人学生にとっても、今後の研究活動に資する有意義なものとなった。(図2)

日付	講師名 (日本・シンガポール・台湾)	講義タイトル
9月18日(火)	産業医科大学 高橋 謙 教授 国立シンガポール大学 テビッド・コー 教授 国立台湾大学 レオン・グオ 教授	イントロダクション
9月18日(火)	①国立シンガポール大学 テビッド・コー 教授	有害因子の暴露評価
10月2日(火)	①産業医科大学 大和 浩 教授	大学における労働安全衛生マネージメントシステム
10月2日(火)	②国立シンガポール大学 サラバナン 教授 シンエン・チア 教授	大学での労働安全衛生
10月9日(火)	①産業医科大学 戸倉 新樹 教授	職業性皮膚疾患
10月9日(火)	②国立台湾大学 レオン・グオ 教授	内分泌かく乱化学物質の健康影響
10月16日(火)	①産業医科大学 堀江 正知 教授	労働者の健康情報保護と利用
10月16日(火)	②国立台湾大学 JDワン 教授	職業がんの認定
10月23日(火)	①産業医科大学 産業医科大学 橋本 洋 教授	パラフィン包埋組織を用いたRT-PCRによる軟部内腫瘍融合遺伝子の診断的応用
10月23日(火)	②国立台湾大学 TJ チャン 教授	職業および環境関連がん
10月30日(火)	①産業医科大学 高橋 謙 教授 国立シンガポール大学 テビッド・コー 教授 国立台湾大学 レオン・グオ 教授	研修員発表/ディスカッション
10月30日(火)	②産業医科大学 高橋 謙 教授 国立シンガポール大学 テビッド・コー 教授 国立台湾大学 レオン・グオ 教授	研修員発表/ディスカッション
11月6日(火)	①産業医科大学 明星 敏彦 教授	粒子状物質用呼吸保護員のスタンダード
11月6日(火)	②国立台湾大学 チャンチュアン・チャン 教授	大気汚染の健康影響
11月13日(火)	①産業医科大学 高橋 謙 教授 国立シンガポール大学 テビッド・コー 教授 国立台湾大学 レオン・グオ 教授	研修員発表/ディスカッション
11月13日(火)	②産業医科大学 高橋 謙 教授 国立シンガポール大学 テビッド・コー 教授 国立台湾大学 レオン・グオ 教授	研修員発表/ディスカッション
11月20日(火)	①産業医科大学 高橋 謙 教授 国立シンガポール大学 テビッド・コー 教授 国立台湾大学 レオン・グオ 教授	評価
11月20日(火)	②産業医科大学 高橋 謙 教授 国立シンガポール大学 テビッド・コー 教授 国立台湾大学 レオン・グオ 教授	評価

図2 平成19年度国際遠隔講義プログラム

なお、JICA 国際研修コースおよび国際遠隔講義については、従来は JICA 研修生のためのコースであったため、設備、講義スペースなどで、大学院学生を参加させるには不十分な点があった。今後、JICA 国際研修コースとの相互乗り入れを進展させ、本教育プログラムを円滑に実施していくため、講義スペースの拡充および遠隔講義の実施に必要な視聴覚機器等の整備を行った。

iv) 成績評価については、講義、セミナー、JICA 国際研修コース等への出席状況、レポートその他の内容、研究活動状況などを講義担当者、指導教員が厳格に評価し、履修の認定を行った。また、2年次の学生には研究進捗状況報告書の提出を義務付け、3年次以降の研究活動の取り組み等についてアドバイスをを行った。

③セミナー、シンポジウム等の実施について

i) 平成19年9月19日に、国立シンガポール大学

のDavid Koh教授を招いて、大学院特別講義を実施した。講義はすべて英語で行われ、教授は講義中にたびたび学生を指名して質問し、学生はその都度英語で答えるなど、学生にとって実践的英語能力の向上につながる活気に満ちた講義となった。

ii)平成19年11月29-30日に開催された第1回アジア環境変異原学会・日本環境変異原学会第36回大会を共同開催し、内外の研究者による発表、講演に学生を参加させた。国際学会への積極的な参加は、本教育プログラムが目指す国際感覚にあふれた産業医、産業医学研究者の養成に大いに資するものであり、今後も多くの機会を提供していきたいと考えている。

iii)最新の医学研究に触れさせ、学生の研究活動の発展・充実に資するため、「世界最先端の科学者たちから学ぶ」と題して3回の大学院シンポジウムを開催した。各回のプログラムは、図3・4・5に示すとおりである。

第2回産業医科大学大学院シンポジウム  
～世界最先端の科学者たちから学ぶ～

日時:平成19年7月24日(火)  
場所:産業医科大学ラマツイーニホール(小ホール)  
主催:産業医科大学 大学院医学研究科「魅力ある大学院教育」イニシアティブ事業  
座長:川村 越(分子細胞生物学教授)、上田 陽一(第1生理学教授)

プログラム

- 13:10 挨拶 重松 昭生 (産業医科大学 学長)
- 13:15~14:00 「水・電解質代謝に関わるチャネル・トランスポーターと疾患」  
佐々木 成 氏(東京医科大学 大学院歯学部総合研究科 教授)
- 14:00~14:45 「タンパク質は異物をどうやって見分けるのか？」  
山口 明人 氏(大阪大学 産業科学研究所 教授)
- 14:45~15:30 「研究開発 40 年の経験」  
神原 秀記 氏(株式会社 日立製作所 フェロー)
- 15:30~15:45 休憩
- 15:45~16:30 「匂いとフェロモンと身体」  
東原 和成 氏(東京大学 大学院新領域創成科学研究科 准教授)
- 16:30~17:15 「染色体の継承メカニズム」  
柳田 充弘 氏(京都大学 大学院生命科学研究所 特任教授)
- 17:15 挨拶 河野 公俊 (大学院医学研究科長)
- 17:45 懇親会:龍ヶ池会館

図4 第2回大学院シンポジウムプログラム

第1回産業医科大学大学院シンポジウム  
～世界最先端の科学者たちから学ぶ～

日時:平成19年3月3日(土)  
場所:産業医科大学ラマツイーニホール(小ホール)  
対象:本学大学院生、教員  
主催:産業医科大学 大学院医学研究科「魅力ある大学院教育」イニシアティブ事業  
座長:田中 良哉(第1内科学教授)、山下 優教(免疫学・寄生虫学教授)

プログラム

- 13:25 挨拶 (重松昭生 学長)
- 13:30~14:15 講演1.「Gタンパク質共役型受容体:ラボベンチから創薬へ」  
横溝 岳彦 先生(九州大学大学院 医学研究院 医化学分野 教授)
- 14:15~15:00 講演2.「細胞極性・移動制御のシグナル伝達とその破綻と疾患との関連」  
南 康博 先生(神戸大学大学院医学系研究科・医学部 ゲノム科学講座 ゲノム制御学分野 教授)
- 15:00~15:45 講演3.「ストレス応答の科学～細胞がストレスを感じる仕組みと疾患～」  
一條 秀憲 先生(東京大学・大学院薬学系研究科・生命薬学専攻 細胞情報学教室 教授)
- 15:45~16:00 休憩
- 16:00~16:45 講演4.「細胞周期を制御するユビキチン化機構」  
中山 敬一 先生(九州大学 生体防衛医学研究所 細胞機能制御学部門 分子発現制御学分野 教授)
- 16:45~17:30 講演5.「第2の遺伝暗号:ヒストン構造の認識」  
加藤 茂明 先生(東京大学 分子細胞生物学研究所 教授)
- 17:30 挨拶 (河野公俊 研究科長)
- 18:00 懇親会:ホテルクラウンパレス北九州(旧北九州パレスホテル)

図3 第1回大学院シンポジウムプログラム

第3回産業医科大学大学院シンポジウム  
～世界最先端の科学者たちから学ぶ～

日時:平成20年3月8日(土)  
場所:産業医科大学ラマツイーニホール(小ホール)  
主催:産業医科大学 大学院医学研究科「魅力ある大学院教育」イニシアティブ事業  
座長:田中 良哉(第1内科学教授)、山下 優教(免疫学・寄生虫学教授)

プログラム

- 14:00~14:45 「心血管作動性エピゲノム因子の機能と制御」  
深水 昭吉 氏(筑波大学大学院生命環境科学研究科/先端学際領域研究センター 教授)
- 14:45~15:30 「骨免疫学による運動器疾患の新たな治療戦略」  
高柳 広 氏(東京医科大学大学院歯学部総合研究科 分子情報伝達学 教授)
- 15:30~15:45 休憩
- 15:45~16:30 「T1N0母転ノミア形成の分子基盤」  
高浜 洋介 氏(徳島大学ゲノム機能研究センター 遺伝子実験施設 教授)
- 16:30~17:15 「中枢神経系の再生戦略」  
岡野 栄之 氏(慶應義塾大学医学部生理学教室 教授)
- 17:15 挨拶 河野 公俊 (大学院医学研究科長)
- 17:45 懇親会:龍ヶ池会館

図5 第3回大学院シンポジウムプログラム

第1回は平成19年3月3日に開催し、大学院学生、教職員、学外者約120名が参加した。(写真5)

第2回は平成19年7月24日に、第3回は平成20年3月8日に開催し、それぞれ、大学院学生、教職員および学外者約110名が参加した。(写真6)



写真5 第1回大学院シンポジウム



写真6 第3回大学院シンポジウム

いずれの回も医学の分野で最先端の研究に取り組んでいる研究者を講師として招聘し、正に最先端の知識、情報を得ることができた。講演ごとに熱心な質疑応答が繰り返され、終了後のレセプション会場でも講師を囲んでの意見交換が続くなど、極めて充実した内容で、学生だけでなく、教員にとっても、今後の教育・研究活動の推進に役立つ大変有意義なものとなった。

また、平成20年3月14日に、他大学薬学部から招聘した3名の講師との交流を介した研究活動の推進を目指して大学院イニシアティブ事業ワークショップを開催し、学生および教員約70名が参加した。学生は、学外講師による講義と今後の研究活動に対

する適切なアドバイスを受けることができた。

(2) 社会への情報提供

①平成18年11月13日に開催された平成18年度「大学教育改革プログラム合同フォーラム」ポスターセッションに参加し、本学の「アジア国際産業医学研究者養成プログラム」の概要について展示、説明を行った。

(図6)

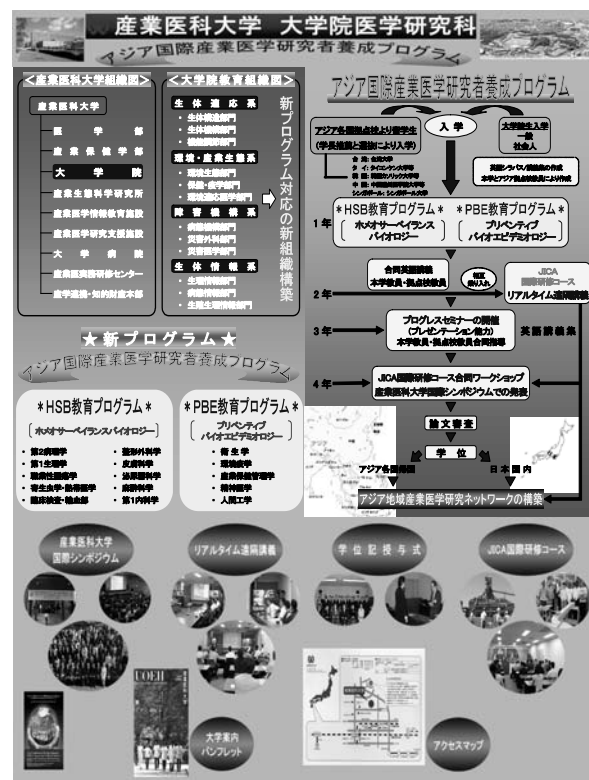


図6 教育プログラムのポスター

②本学ホームページに「魅力ある大学院教育」イニシアティブのサイトを設け、本教育プログラムの内容、セミナー等の開催情報などを掲載し広く情報提供を行った。今後も引き続き、これまでのプログラムの実施結果や各種イベントの案内等を、ホームページその他の印刷媒体を通して広く社会に公表していく。

③毎年実施されている JICA 国際研修コースや平成19年度に共同開催した第1回アジア環境変異原学会・日本環境変異原学会第36回大会、これまでに開催した大学院シンポジウム等の機会を利用して、本教育プログラムの広報に努めてきた。特に、JICA 国際研修コースや国際学会での英語による広報の結果、JICA 研修員の中から本プログラムに入学を希望する学生が出てきたことは、一定の成果が得られたものと考えている。

④大学院シンポジウムの開催にあたっては、ポスター、プログラムを作成し、学内のみならず、医療・理工農系の大学、大学院や研究機関等に送付するとともに、大学ホームページにおいても開催通知を掲載し、広く広報を行った。その結果、学外からも学生、研究者等の参加を得ることができた。(図7)

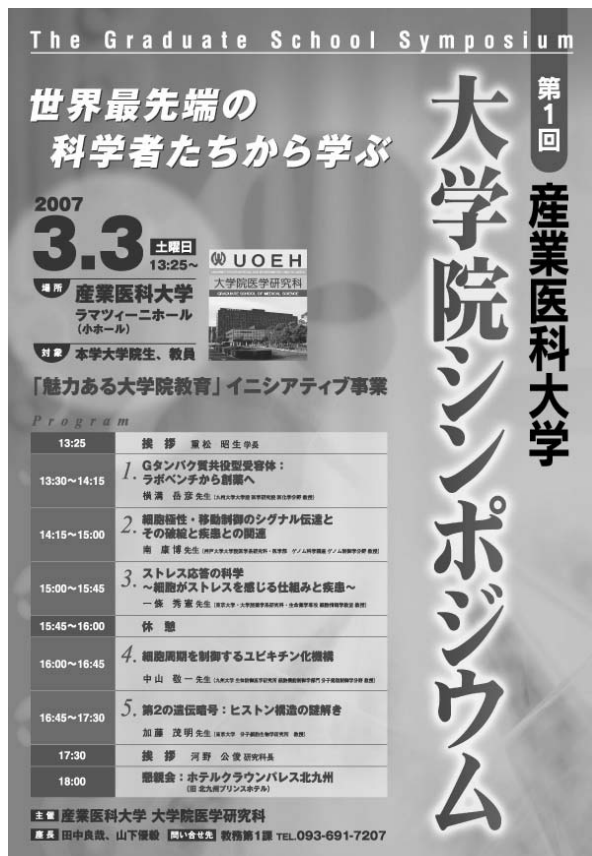


図7 大学院シンポジウムポスター

#### 4. 将来展望と課題

##### (1) 今後の課題と改善のための方策

本教育プログラムは、アジア各国の産業医学研究に関心のある留学生を受け入れ、日本人学生とともに競争的環境の中でお互いに切磋琢磨しつつ、専攻横断的なカリキュラムとして編成されたHSB教育プログラムとPBE教育プログラムを実践するとともに英語講義の実施などをとおして次世代の産業医学研究を推進できる国際感覚にあふれた産業医、産業医学研究者の養成を目指すものである。前記3(1)教育プログラムの実施状況と成果に記載したとおり、2年間のプログラム実施の中で課題として明らかになった点を以下に記す。

①アジア留学生の募集活動については、平成19年度は前年度より募集時期を早め、7月に募集要項を配布したところであるが、この時期は各大学とも夏季休業に

あたっており、学生に対して十分な周知が図れなかったため、応募者が前年度より減少する結果となった。本学での留学生の選抜、決定を早めることで、留学生が来日の手続きなどを行う期間を確保し、4月には確実に入学できるよう配慮した措置であるが、この点は反省し、次年度以降の留学生募集に生かしていきたい。

なお、諸外国の制度等を踏まえ、今後は秋入学についても検討する必要があると考えている。

②本教育プログラムでは、専攻共通講義として現行カリキュラムをHSB教育プログラムとPBE教育プログラムの2つに編成することとしている。現行カリキュラムでも学生は柔軟な教育・研究体制のもと学際的な分野における知識の修得と研究の推進が可能となっているが、2つの教育プログラムの実践による教育効果の一層の向上とJICA国際研修コースの相互乗り入れの進展のためには、現行の専攻・部門の再編やカリキュラムの改正は避けて通ることができない。現在、大学院医学研究科において鋭意検討を進めているが、現時点では本格的な改正には至っていない。

③JICA国際研修コース、国際遠隔講義への学生の出席状況は、本人の実験、研究や大学病院での研修と重複しており、必ずしも良好とはいえなかった。また、講義のテーマによって出席率に差異が出ている。このコースは全て英語で行われており、日本人学生にとっても国際感覚を高めるために有意であることは既に述べたとおりであるが、今後このコースとの相互乗り入れを推進し本教育プログラムの充実を図っていくためには、現行カリキュラムとの整合性を十分に考慮する必要がある。

④2つの教育プログラムは、健康維持に必要な生体機能に関する知識を修得(HSB教育プログラム)し、それを踏まえたうえで予防医学の研究へと進展させる(PBE教育プログラム)ものであり、これによって教育効果を一層向上させることを狙いとしている。この2つの教育プログラムの編成とこれに基づく英語講義の実践は、各教員に教育に対する緊張感をもたらすとともに、将来の大学院教育・研究の充実に向けた意識改革を図る上で一定の効果を得ることができた。今後、更なる教育効果の向上と、大学院教育・研究の充実・強化のため、大学院医学研究科において事業の検証と改善を検討していくこととしている。

## (2) 平成20年度以降の実施計画

アジア留学生は既に2年次生まで学年進行しており、現在、来年度入学生の募集準備を進めている。これまで留学生の経済的支援は、受け入れ講座の協力に依って来た。一方、授業料等の免除に当てる財源は、大学予算の範囲内で実施してきたが、年度進行とともに増大するため、安定的に財源を確保することが重要である。本学は今年度に関学30周年を迎えることから、その記念事業の一環として組み込むことで留学生の受け入れを継続することとした。

また、本教育プログラムのうち、3～4年次のプログラムである、プログレスセミナーの開催とアジア拠点校教員を招聘しての成績評価や研究指導、JICA国際研修コースとの合同ワークショップの開催に向けた準備を進める。

大学院教育の実質化は、優れた研究者の養成には必須であり、本教育プログラムもこのことを意識して実践してきた。このことは、これまで個々の教員の指導能力や研究能力に依存してきた大学院教育・研究を、教員組織をまとめ、教育・研究意欲を高め、研究科全体の底上げを図るためにも不可欠と考えている。今後引き続き、これまでの事業内容を検証しつつ、改善策を着実に実施していくこととしている。

また、平成20年度からは、大学院教育の更なる実質化を目指して複数指導体制を確立する予定である。更に、3～4年次に日本人学生と留学生を含めた少人数フィールドワーク海外研修プログラムの創生を企画しており、大学院全体として次世代型産業医の養成を目指して、より充実したプログラムを構築していく予定である。留学生と日本人学生がともに、学際領域の研究を理解できる国際水準の産業医、産業医学研究者として活躍し、将来的にアジア地域で、国際的に通用する産業医学研究者ネットワークの構築を推進することで、アジア地域に進出している日本企業での産業医活動に寄与するだけでなく、アジア各国の経済発展、ひいては平和的繁栄に貢献できるものと確信している。



## 「魅力ある大学院教育」イニシアティブ委員会における評価

## 【総合評価】

- 目的は十分に達成された
- 目的はほぼ達成された
- 目的はある程度達成された
- 目的は十分には達成されていない

## 〔実施（達成）状況に関するコメント〕

国際感覚にあふれたアジアの産業医・産業医学研究者を養成するという目的に沿って、国際研修、国際遠隔講義などの計画が着実に実施され、大学院教育の実質化に貢献している。アジア各国からの留学生との競争的環境の下での学際領域の研究の推進は、国際性のある研究者養成の取組という点で他大学への波及効果が期待される。

情報提供については、取組の概要やシンポジウムの報告等をホームページに掲載することなどにより着実に行われている。

今後、本教育プログラムの実効性のある継続的な実施のため、留学生受け入れ支援体制の確保、新たな海外研修プログラムの発展などの改善・充実を図ることにより、自主的・恒常的な展開による更なる成果が期待される。

## （優れた点）

- ・アジアの留学生を受け入れ、日本人学生と共に教育プログラムに参加し、遠隔講義などにより海外との双方向の情報交換を行う実施する教育カリキュラムは、国際性豊かな人材を養成する優れた教育モデルとして高く評価できる。

## （改善を要する点）

- ・本教育プログラムへの留学生受入を恒常的に確保するための具体的な方策の検討について、進展が望まれる。
- ・健康維持に必要な知識を習得するHSB教育プログラム、予防医学の研究への進展を図るPBE教育プログラムのより効果的な展開や、JICA国際研修コースとの相互乗り入れの進展のため、カリキュラムの再編等による改善・充実に向けた方策について早急に検討することが必要である。